

待兼山俳句会

第七百一回

世話人

山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子
東中 亂・向井邦夫・森 茉衣

令和七年六月十六日（月）

会場 大阪俱楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・根来眞知子
東野太美子・森 茉衣・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・東中 亂・平井瑛三

以上出席者十一名十投句者七名 計十八名

兼 題

夏の山・冷蔵庫（幹三） 蟻・緑蔭（暁子） 当季雜詠 通じて八句

次 回

例会 令和七年七月十四日（第二月曜日）会場 大阪俱楽部会議室 締切 午後二時

兼題 梅雨明・裸（幹三） 胡瓜・ナイター（暁子） その他当季雜詠

次々回

令和七年八月十八日（第三月曜日）

選者吟

夏山の小さき穴より電車出づ

幹三

たいへんな報せを伝へ歩く蟻
冷蔵庫分厚きドアで世を隔つ

わが脚を高嶺のごとく蟻登る
緑蔭に古書を並べて店主居ず
緑蔭を抜けゆく時のバス速し

暁子

幹三 選

奥飛驒の頭上に迫る夏の山

◎故郷に夏山高し父の墓

緑蔭にでんと座りて親ゴリラ

冷蔵庫開けては閉めてまた開ける

神木の緑蔭にして氏子衆

◎蟻の列黙黙と続きをり

蟻の行列大手門出てどこまでも

道連れは水筒二本夏の山

声あらば蟻の巣さぞやうるさからむ

唸る音眠れぬ夜の冷蔵庫

わが脚を高嶺のごとく蟻登る

手を入れて頭入れたき冷蔵庫

一匹の黒大蟻の過りたる

緑蔭に座つてからの長話

近頃は蟻を殺す気になれず

微睡むや潮騒届く緑陰に

◎緑蔭に古書を並べて店主居ず

日曜日開け閉め激し冷蔵庫

◎夏山に樹々の匂を嗅ぎに行く

安廣

安廣

瑛三

茉衣

太美子

安廣

瑛三

輝子

輝子

眞知子

堯子

堯子

暁子

兵十郎

兵十郎

輝子

朱美

翠

暁子

暁子

輝子

◎皆同じ貌なり蟻の道続く

安廣

眞知子

眞知子

太美子

太美子

太美子

和江

和江

和江

冷蔵庫大きくなり吾は小さくなり

◎緑蔭を抜けゆく時のバス速し

大木の緑蔭深く時流れ

緑蔭の風と語らん母の里

輝子

安廣

眞知子

眞知子

太美子

堀子

堀子

堀子

堀子

堀子

堀子

堀子

堀子

・蟻の列黙黙と続きを読む

安廣

「もだもだもだ」と読むと蟻の歩き方や体の構造が浮かび、「もくもくもく」と読むと観念的になり蟻の列の静けさを思います。漢字を擬態語化すると意味が付与されますね。おもしろい。

・夏山に樹々の匂を嗅ぎに行く

輝子

わざわざ「嗅ぎに」行つたのではなく、歩いていると最も「樹々の匂い」が夏山を感じるものであつた、ということ。それをこんな風に詠む・俳句のおもしろいところです。

・緑蔭に古書を並べて店主居ず

暁子

緑蔭に目が慣れて来て、並べられている本の題名が見えてくる。店主はいざこ?と見まわすが不在。静かな夏の昼下り、のんびりした気分が上手く詠まれています。

・皆同じ貌なり蟻の道続く

輝子

蟻の列は、大きな長い一体の生き物のように見えます。

その「体」を構成している一匹ずつの蟻に個性や自覚は無いのでしょうか。観察しているうちにふと気づいた咳きが句になりました。俳人らしい眼差しです。

・一步ごと村沈みゆく夏の山

安廣

どんな道をどういう風に歩いているのか。そのことを考えて楽しくなった句です。山を登ると村がだんだん見えます。やはり下り道でしょうか。真直ぐな道に山が迫り来るのかも。

・緑蔭を抜けゆく時のバス速し

暁子

並木道を走るバスの窓の光は明暗明暗と変化します。そのことに「速さ」が感じられた、というのが私の鑑賞。バスの中から眺める風景を俳句的に「撮影」した、という印象です。

暁子 選

緑蔭に坐つてからの長話

輝子

もののふの矢止の松に蟻軍団

◎冷蔵庫の中に我が家の個性かな

緑蔭の古本市にひと日居て

蟻のあとつけて行く蟻真昼間

幹三

眞知子

◎夏山の小さき穴より電車出づ

蟻の列黙黙黙と続きをり

幹三

冷蔵庫大きくなり吾は小さくなり
雲海を抜きて遙けし富士の山

安廣
太美子

男の子土俵描いて蟻二匹

安廣
恵子

冷蔵庫開けては閉めてまた開ける

茉衣

緑蔭を鳩に譲つてもらひけり

幹三

◎冷蔵庫分厚きドアで世を隔つ

幹三

手を入れて頭入れたき冷蔵庫

兵十郎

声あらば蟻の巣さぞやうるさからむ

真知子

蝶翅掲げ蟻の行進誇らしく

盛雄

たいへんな報せを伝へ歩く蟻

幹三

◎夏山の車窓に迫り来る勢

太美子

蟻の列見届けていた幼き日

朱美

- ・夏山の車窓に迫り来る勢
太美子
- ・夏山の車窓に迫り来る勢
幹三

列車でも車でも夏の山中を走ると、その力強さに圧倒される。両側に迫る山々、あるいは何駅も続く山なみなどつづくづく山の威力に感動する。この句も前の句もそれぞれの作者の夏山に対する畏敬の念を感じる。

暁子 特選句講評

・冷蔵庫の中に我が家の個性かな

幹三

冷蔵庫の中を見れば、その家の状況が分かる。家族構成や家族の好み、誰がお料理しているかなど、それら一切を一家の個性と表現し、冷蔵庫の存在意義を再認識された。

・冷蔵庫分厚きドアで世を隔つ
幹三

幹三

ドアを開ければ一家の個性が分かるほど様々なものが見られる冷蔵庫であるが、一たんドアを閉めれば無機質な存在。前の句もこの句もよくある冷蔵庫の句とは一味違つてゐる。冷蔵庫の側に立つての発想か。

なお今回「緑蔭」という季題の表記を「緑陰」と書かれた方々もあつた。間違ではないが、植物による陰は草冠を使つてはいかがでしようか。ほとんどの歳時記には草冠がついています。

互選三句

朱美 選

雲海を抜きて遙けし富士の山

森深く祝詞響きて夏祓

夏山の満天の星手が届く

モンゴルのゲルでの夜も星が掘めるとと思うほど近かつた。

安廣 遊子

堯子

瑛三 選

森深く祝詞響きて夏祓

緑蔭のベンチに傘の忘れ物

山頂で風が迎える夏の山

爽やかな気持ちのよい句。小生なら「山頂の」としたい。

遊子 輝子

朱美 輝子

和江 選

故郷に夏山高し父の墓

草のぼる蟻くだる蟻ハイタツチ

微睡むや潮騒届く緑陰に

波音は夢の中のような気がします。

安廣 兵十郎

翠

かな子 選

事故跡地半焦げで立つ冷蔵庫

緑蔭に古書を並べて店主居ず

蟻の列飽かず見てゐる幼き児

蟻の列に夢中で動かなかつた息子も五十路。

恵子 晓子 安廣

今も虫好き。

恵子 選

蟻の列見届けていた幼き日

大木の緑蔭深く時流れ

微睡むや潮騒届く緑蔭に

波音を聞きながら木陰でうとうと、至福の時ですね。

朱美 堯子

堯子

堯子 選

一度だけ君とあの日の夏の山

冷蔵庫食料満たす小さき幸

外は雨開けて問答冷蔵庫

上5が生きて、庫内を覗いて献立を思案する様が見える。

眞知子 安廣 恵子

眞知子

太美子 選

冷蔵庫分厚きドアで世を隔つ

故郷に夏山高し父の墓

夏山の小さき穴より電車出づ

中七の措辞が素晴らしい。山の様子、作者の感動見える。

幹三

安廣

幹三

輝子 選

俯瞰して視野の限りの青嶺かな

冷蔵庫時に失せたるシュークリーム

何気なくむくろ反せば蟻蟻蟻

蟻の字を三つ使つた。夥しい蟻の様が見えるようだ。

太美子 和江 乱

太美子

和江

乱

兵十郎 選

夏山の小さき穴より電車出づ
島人の時間ゆるりと大緑蔭
村にまではみ出してゐる夏の山
「村にまではみ出してゐる」と言う措辞が素晴らしい。

茉衣 選

事故跡地半焦げで立つ冷蔵庫
緑蔭に古書を並べて店主居ず
微睡むや潮騒届く緑陰に
海浜から遠く離れた木蔭でうとうと潮騒を聴く安らぎ。

眞知子 選

里若葉寄る辺はすでに在さねど
しずしずと翅進みゆく蟻の道
島人の時間ゆるりと大緑蔭
大緑蔭の島を流れるいかにもゆつたりした時間。

幹三
太美子
幹三

幹三
太美子
幹三

盛雄 選

緑蔭を鳩に譲つてもらひけり
もののふの矢止めの松に蟻軍団
夏山の小さき穴より電車出づ
遠くに見えるトンネルの穴が夏山と相俟つて絶妙。

安廣 選

緑蔭の児らによきによきと足を振る
夏山の小さき穴より電車出づ
一度だけ君とあの日の夏の山
自分の経験にピッタリ重なつたので思わず採りました。

遊子 選

蟻の列黙黙黙と続きをり
夏山の満天の星手が届く
蟻の行列大手門出てどこまでも
蟻の行列が大手門を出る。大名行列の寓意を込めて。

安廣
堯子
瑛三

安廣
堯子
幹三

翠 選

雲海を抜きて遙けし富士の山
尾根歩く響く歌声夏の山
緑蔭に古書を並べて店主居ず
公園の古書店。店主の姿もない。訪問客は緑の風だけ。

安廣
恵子
堀子

神木の緑蔭にして氏子衆
夏山の満天の星手が届く
しずしずと翅進みゆく蟻の道
蟻ではなく、「蟻が進」むと詠んだところが秀逸。

太美子
堀子
太美子

参加者自選句

雲海に暑さ忘れる夏の山	朱美
夏の嶺近くに見えて遠きかな	瑛三
八海の頂八方夏の山	和江
所在なく冷蔵庫を開けてみてひとり	かな子
外は雨開けて問答冷蔵庫	恵子
大木の緑蔭深く時流れ	堯子
夏山の車窓に迫り来る勢	太美子
道連れは水筒二本夏の山	輝子
緑蔭の途切れ一等三角点	兵十郎
屋根瓦滑る音あり花柘榴	茉衣
緑蔭に長つ尻決め犬と吾と	眞知子
微睡むや潮騒届く緑陰に	翠
緑陰の児らによきによきと足を振る	盛雄
蟻の列黙黙黙と繞きをり	安廣
仏跡に犬も寝そべる昼寝どき	遊子
通せん坊小流れ嬉し夏の山	乱

即吟

花を付けた柘榴の枝と籠いっぱいの	暁子
熟れた枇杷の実が用意されました。	恵子
見つめられ柘榴の花の落ちにけり	堯子
花柘榴赤く咲けども落花あり	太美子
甘き汁蓄へ丸し枇杷の実や	輝子
零れこぼれ終の一花を花石榴	兵十郎
枇杷の実のかそけき産毛満身に	茉衣
曲りたる枝先々に庭の枇杷	眞知子
卓上で愛らしきかな花柘榴	翠
枇杷の実の熟れるを待てば数が減り	盛雄
手ざはりの丸き獣のやうな枇杷	安廣
小さくとも味は負けじと家の枇杷	遊子
句座にありなんと豪華な枇杷の山	乱

ひとこと

山田 安廣

今回の例会では重要な事が2件決められました。

先ず会費の値上げについてであります。昨年まで皆様方から頂戴する年会費は1万2千円で運営して参りましたが、会員数の減少を反映して集金額が年々減少する一方で、最近では年会費だけでは会場費も貢えないと状況になっています。全員で種々討議を重ねました結果出来るだけ経費を削減する一方で年会費は値上げせざるを得ないと結論となりました。

即ち、印刷した会報の発行は中止し、会報をデータの形で配布する事によって経費を削減する一方、会費は1万7千円に値上げさせて頂く事となりました。詳しく述べ6月17日に発信いたしましたメールをご覧下さい。

最終原稿の段階で原稿を皆様方にメールで配信致しますので、ご自分の作品（互選で入選した作品）とご自分が選句された作品をしつかり校正して頂く、という事であります。これは今まで編集者が担つて居られた校正の最終責任を皆様方に持つて頂く事によって、編集者の皆さん精神的負担を軽減する為の措置でございます。

本件についても6月17日付けで詳細をご報告しております。改めて当該メールをご確認頂きたく存じます。

それぞれお大変かと存じますが、事情ご賢察の上ご協力賜りますようよろしくお願い申し上げます。

次に、会報の校正の仕方ですが、先ず新清記（選句用作品一覧表）に記載された句がご自分の提出された短冊と齟齬が無いかどうかを確認頂きますと共に